

学年通信 第三号

平成22年10月16日

明秀学園日立高等学校 第2学年



仲秋の候、皆様方にはいよいよご清栄のこととお喜び申し上げます。
明秀日立生(白梅)の諸君。「明るく・清く・凛々しく」の建学の精神に照らし合わせ、それに適うよう日々を過ごしていますか。白梅への道標である校訓を日々実践していますか。「やるからやる気が出る」を実感していますか。そして、挨拶や手伝いを習慣化していますか。

現代版「学問のすすめ」の提言に立ち返ります。この号も、よく目につくところに貼り付けておくこと。

『光陰矢の如し。少年老いやすく学成り難し』諸君！思索にふけり、垣根を越えよ。

学習サイクルのスタートは自主学習

我々には、努力すればその努力を無駄にたくないという意識が必ず働きます。やったことを振り返ろうという意識は、前もって努力したからこそ生じる意識です。努力の量に比して振り返らずにはおれなくなります。(中略)これは「予習-授業-復習」のサイクルに酷似しています。本番(授業)に備え、前もって努力(予習)し、本番(授業)に臨み、次に生かすために振り返り(復習)を行う。しっかりと前もって努力をしたからこそ、その努力を無駄にしないように授業では集中でき、授業での収穫を無駄にしないため、授業の復習に勤しむ。予習で誤りや解らなかったこと(失敗)

があれば、それは反って身に付きやすく(糧)なる。やはり、やらされてやる部分はどこにもない**内発的動機**のなせる業です。ついでに言うておけば、自己鍛錬なき自己主張をする者達は、予習もせず、授業中に自己主張(喋る・ふざける・寝る etc)に終始し、授業を振り返る意識など微塵も生じないということになります。これは、外発的動機でしか動けない人のなせる業ということになりましょう。(1年次学年通信号外より抜粋)

皆さんの多くは、これまで幾度も勉強を頑張ろうと決心しつつ、長続きがしなかったという経験を持っています。そしてそこから抜け出せずにいる。どうせまた長続きがしない。その都度、自己嫌悪に陥るので、二の足を踏み、努力することから次第に遠ざかっていきます。高校生になってこの方、心機一転奮起したものの、やはり頑張りが続かず、そのもどかしさに辟易(へきえき)している人は多いようです。諸君を見れば分かります。自宅学習のアンケート調査結果(第二号に掲載)が確たる証拠です。さて、この悪循環から抜け出すにはどうしたらよいのでしょうか。

一努力が長続きしない人達の特徴一

その前に、もう少しこれまでのおさらいをしておきましょう。諸君の多くが学習の習慣を持たないのは、生活に習慣と呼べるものを失った中で生きているからだとお話しました。なまじっか快適な生活を送ることができるようになったばかりに、我々は日常生活の中から「自らの意思で動くべき行為」つまり「習慣」を失ってしまったのだと。「手間のかかる行為」をことごとく排除することが我々にとって快適な暮らしであることは言うまでもありませんが、その実現の見返りに、我々は『まずは自らを動かす力』を得るプロセスを手放してしまいました。

こうしたわけで頑張りが長続きしないのは、習慣を身に付ける力=『まずは自らを動かす力』に欠けているから

です。そして、頑張りが長続きしない人達にはある共通した特徴があります。授業を受け身で受けていることです。

『まずは自らを動かす力』に欠けているのだから、当たり前といえば当たり前ですが、この人達は授業をしっかりと受けたことが勉強を頑張ったこととイコールになっています。ここが大きな間違いであり、かつ頑張りが長続きしない原因であることに気付いていません。学校の授業を中心に位置づけている人は、当然自宅での学習が疎(おろそ)かになりがちです。授業で100%理解できないのは言うまでもないことで、授業を頑張っているのだから何とかするというのは中学校までの話。こんなことは、高校入学する以前に何度も聞いていたはずですが。

一ありきたりな話の中に事の本質が隠れている一

高校で学習習慣を身に付けられない人の多くは、中学生のままのスタイルで今日に至っています。授業での頑張りが勉強だと思違いをして、授業のみで学習のサイクルを完結させようとしています。中学校まではそれが何故可能だったのかというと小学校、中学校の授業は授業そのものが予習・授業・復習の役割を果たしながら進められていたからです。ひとつの単元を学ぶのに予め必要な知識をおさらいし(予習)、新しい知識を学び(授業)、その内容を確認する(復習)。小、中学校の授業ではこのサイクルが成り立っていた。だから、中学校までは授業さえ聴いていれば、自主学習なくしてもできる。テスト勉強くらいでなんとかなってきたのです。

身をもって知っているように、高校ではそうはいきません。高校の教科書は、予習、復習のサイクルを自主的にこなさないと修得しきれない厚みになっています。しかしこれは、勿論、義務教育を終えて進学した高校生としてあるべき学習能力に照らし合わせた分量で作成されているんです。分かりましたか。中学校までは、授業で予習復習を保証してくれていたのですが、高校にはその保証が殆ど無いと言っている。だから、中学生までに学習習慣を身に付けていた人は、高校生になってから学力を大きく伸ばします。分量が分量だけに授業だけではどうしても解らなくなるので、授業に集中しきれずに頓挫してしまふ。これは、理解を助ける予習や復習をしていないから当然なのです。

「理解を助ける予習や復習をしていないから当然です」これだけ聞けば、「何だ、ありきたりな話だな」と思うかも知れませんが、長続きしない事の本質を見抜いていないために、決意しては挫折するという悪循環から抜け出せずにいる皆さんには、このありきたりな話の中にこそ、事の本質が隠れていることを見逃していたのです。そこを洞察せず、原因を究明しない。諸君にとっては「そんなことは分かり切った話」で終わってしまう。または、「その予習復習が長続きしないから困っているのだ」で終わってしまう。長続きがしない人達は、いざ頑張り始めてもその頑張りのサイクルが短期間で途切れてしまう人達です。また奮起してもすぐに途切れてしまう。途切れさせてしまわないためには、まず、途切れてしまうその箇所とその原因を見極めることが大切です。

それではここで事例を挙げてみます。まず、授業内容の理解度が落ち、問題集で復習を始めたA君です。始めてはみたものの授業の単元(内容)と自宅で解いている問題の単元(内容)の間には既に隔りがあります。現在の授業内容まで早く辿り着きたいのですが、現在の授業を理解するためにはこれまでの内容を理解しなければ難しいようです。努力した結果は授業理解になかなか繋がらない。その見返りが時宜(じぎ)を得て返ってこないの、問題集に手を伸ばす意欲をとうとう無くしてしまいました。何故隔りがあったのかというと、もちろん授業内容をその日の内に復習していなかったからです。復習を日延べしてしまう。すると、授業についていけなくなる。これはまずいと思って、分からなくなった辺りを見当づけて、そこから復習を始める。復習内容が現在進行中の授業の理解には役立たないので、自分の意思で始めた努力にも関わらず頓挫してしまいます。努力した覚えはあるが、学習の習慣がつかないという人は殆どがこのパターンで長続きがしません。

B君の場合、授業を理解できないのは自分の集中力の無さと自問自答し、授業に臨む自らの姿勢を改善することから取り組んでいるようです。それはそれで正しいのですが、あくまでも授業は受動的で、受け身に回ってしまう習性が染みついているということでしょうか。集中力だけでは、授業は理解できませんし、「集中力、集中力」と唱えても集中力は高まりません。集中力を高める繋がりが重要です。だから長続きがしない。授業に身を入れるためには、その前にやることがあるのです。

A君、B君いずれにしろ、長続きがしない人達は、授業を受ければ何とかなるといった「授業を受け身で受けている」という特徴があります。換言すれば、中学生までは通用したスタイルをまだ引きずっているのです。

－努力を長続きさせるためには－

冒頭に1年次の号外を抜粋したのは、「**努力によってもたらされる効果の繋がりが、学習習慣を成立させる**」のだと捉え直してもらいたかったためです。我々の行動は複雑な心理によるもののようで、実は単純なのです。予習をする。予習で理解できなかったところが授業で理解できる。なるほどそうかと予習した甲斐があったとその効果のほどを確認する。復習する。覚えている。授業をしっかり受けた甲斐があったと喜ぶ。そしてまた、次のところを予習する。この努力の効果が継続することによって学習習慣が成立します。

A君、B君のように授業で効果を得られないことから、学習サイクルが途切れてしまうわけですから、授業を軸にするのは誤りです。図に示したように、最初は自主学习に軸足を置いておかねばなりません。その努力が授業で実を結ぶのです。学習サイクルが授業しかない人(サイクルがあるとは言えないが)は、効果の繋がりが授業でぶつりぶつりと途切れてしまいます。

ですから、自主学习(自宅学習)を軸足に置いた学習サイクル、つまり学習習慣づくりが必要です。集中して授業を受けることは当たり前のこととしても、そこから始めるのではなく、その日受けた授業の復習、もしくは、翌日の授業の予習から取り組むべきなのです。つまり、自主学习から取り組み**「予習－授業－復習－予習」のサイクル**もしくは**「復習－予習－授業－復習」のサイクル**を構築することが学習習慣を確立することになります。**「努力が生きるサイクル」**を構築することです。

詰まるころ、内発的動機です。自主学习に軸足を置くことで、授業に対する集中力が増し、予習、復習をするという意欲が増します。授業から入れば自ずと受け身になり、自主学习に向かう意欲を減退させます。

学習習慣を持たない諸君、たった今から、成功するイメージを持って、今日の授業の復習や明日の授業の予習を始めなさい。ただ、やみくもに勉強しても効率は悪いですよ。自主学习には工夫が必要です。

－工夫しなければ勉強ではない－

単語を覚えるなどにしても、やみくもに覚えようとしても効率が悪いことは知っているでしょう。

ある単語は覚えやすく、ある単語は覚えにくいということは、**多分皆さんよくご存じ**でしょう。これには**一部客観的、また一部主観的理由があります**。

一番覚えやすいのは、何か具体的なもの、窓とか、家とか、本とか、鉛筆のような、具体的なものを表す名詞。次に覚えやすいのが感じとることの可能な性質、色とか、形とか、大きさを表す形容詞、つまり青いとか、丸いとか、小さいなど。次が抽象名詞。四番目が想像しやすい具体的な行為、走るとか、手渡すとか、運ぶを表す動詞で、最も覚えにくいのは抽象的な行為を表す動詞です。遂行するとか、保証するとか、中傷するとか、採用するとかなどです。(カトー・ロンプ著『わたしの外国語学習法』創樹社 米原万里著『不実な美女か貞淑な醜女か』新潮社より孫引き)

このように、覚えやすいものとそうでない単語の品詞や特徴を把握しておくだけでも記憶効率は向上します。こうした単語を覚えるという作業に関わる勘所(かんどころ)、要所を押さえた上で、記憶しやすくするための工夫をしていけばよい。この工夫という行為そのものも立派な勉強なのです。

また、記憶しやすいものとそうでないものは、以下のように分類できます。

第一に、意味のあるものは覚えやすく、その逆は覚えにくい。

第二に、関心のあるものは覚えやすく、その逆は覚えにくい。

第三に、理解したものは覚えやすく、その逆は覚えにくい。

第四に、論理的なものは覚えやすく、その逆は覚えにくい。

第五に、物語性のあるものは覚えやすく、その逆は覚えにくい。

第六に、リズム感のあるもの、調子がいいものは覚えやすく、その逆は覚えにくい。

第七に、イメージしやすいものは覚えやすく、その逆は覚えにくい。

(米原万里著『不実な美女か貞淑な醜女か』新潮社 ちよっと断っておきます。この刺激的な書名は、同時通訳という職業を著者が自虐的に譬(たと)えたものです。)

ですから、覚えにくいものを覚えやすくするために工夫をすれば良いのです。ただし、やり方やコツが分かっても、実行無くしては役に立ちません。最終的には自らの強い意志、信念にかかってきます。諸君の努力如何(いかん)です。

－頭髪などでいまだに指導されている人達の特徴－

この人達は言うまでもなく外発的動機に支配されて生きている人達です。内面を引き上げていきたい考えはあるのに、外見に引きずられてしまう。ここが重要なところですが、この人達は、他人を見かけで判断してしまうので、自分も人から見かけで判断されているという呪縛から解き放たれずにいます。こういう人に限って、「人は見かけによらない」と自己弁護をしますが、この慣用句は、「人は外見で判断できない」という見識を持った人が、「やはり外見では判断できないな」と膝を打つ際に使用される趣があり、言うなれば、しっかりした身なりの側の人が使う文句であって、人は見かけで判断されるという垣根から抜け出せない人が言い訳で使用する言葉では決してないのです。

頭髪などでいまだに指導される諸君に特に訴えたいことは、外見ですら外発的動機に支配される諸君が、つまり内面より外面(そとづら)を優先する諸君が、どうして「学び」という内面へ向かう行為だけを、人は見かけで判断されるという精神的呪縛から無縁であることができるだろうかということです。

こうした人達は「学び」さえも見栄といった外発的動機に支配されてしまいます。見栄で「学び」に立ち向かう人、身に付けるべき習慣は持ち得ません。何せ見栄ですから、長続きしません。労せずして報われることを夢に見、ある日突然頭が良くなるといった様な虚しい空想を繰り返したりします。つまりこの手の人達は、努力せずに見栄(みば)えという結果だけを求め、それに満足します。努力無しに報われることは一切ありませんから、一人空想に耽(ふけ)るしかない。『まずは自らを動かす力』に目を向けぬまま、自分が変わるその日を待ちわび、その日の訪れないことを何か、或いは誰かの所為(せい)にしています。この段階にいる人が、毎度毎度頭髪等で指導を受けている人達です。こうした内面に向かわないでうわべに逃げる行為は、努力無しに結果を得ようという行為と構造は同じです。大した努力も払わないのに結果だけを求めるという構造です。

実は殆どの諸君がこの段階にいることに気付いていない。快適な生活に慣れきった皆さんには、この構造からなかなか抜け出せずにいます。今の世の中、さしたる努力も払わず、ボタン1つで結果や答えが出せますからね。インターネットで検索すれば、欲しい答だけをすぐ手に入れることができる。(だから努力に対する不信感が募り、謙虚さを失うと第二号でもお話ししましたね。)とにかく、内面に向かわないでうわべに逃げる行為は、大した努力も払わないのに結果だけを求めるという行為と同じです。

例えば、ボールを遠くへ飛ばす方法、速く走る方法、先に挙げた記憶力を強化する要領など、必要に応じて欲しい答のみを我々は簡単に手に入れることができます。でも、実際の努力が伴わなければ、遠くへ飛ばすことも、速く走ることも、覚えにくいものを記憶することもできない。さしたる努力が払えないに関わらず、性急にも結果だけは手に入れたい諸君は、中途半端な努力に終わることにやぶさかでなくなってしまう。すると、遠くへ飛ばすかたちや速く走るかたちの真似、記憶する要領の記憶、つまり見せかけの結果だけで満足する他ありません。どうです、見せかけで満足する人達と精神構造は一緒でしょ。

心配なのは、ある程度の飛距離、ある程度の速度、ある程度の記憶力を身に付けた人が、自己の努力に見あった結果に満足できず、何かの所為や誰かの所為にしてごまかしてしまうことです。

とにかく、運動にしても勉強法にしても、良い方法を見つけたからといって、そこへ至る過程を実践努力し、検証し、吟味し、考察を経た後に初めて身に付くものだということ、努力無しには何ものも手に入れることはできないことを本当は我々みんなが分かっているくせに、ごまかしてしまうんですね。これは勿論、飽きっぽく、自分に都合のよい理屈を見つけ出して、学習などの面倒くさいことから逃れようとする脳の性質にも起因します。努力をせず済ませようとする脳の「こじつけ」や「言い訳」をうっちゃり、快適な生活を享受したことによる因果のかいなを返していく意思力を我々は養っていかねばなりません。これを『克己心(こっきしん)』と言います。

インターネット等で必要な答を見つけ出して、それを知識にしたとしても、根のはっていない知識はもろく、いずれ消え入ります。それに対し、関係書物を読みあさって、必要な答を導き出した知識の幹は太く、堅固です。

諸君、我々は努力せずして手に入れることのできる些細な結果、あるいは頭髪やピアスや眉剃りや化粧や腰履きなどの外見にすがりつき、内面に向かう行為から逃避する軟弱で幼く、恥ずべき精神を鏡で凝視しなければなりません。

発行が遅れた分、長くなっています。続きは、次号(近日発行)で。